1 剰余の定理

P(a)をaに関する多項式とする

$$P(a)=(a-k)Q(a)+R$$
 $\qquad \qquad (P(a)を(a-k)で割る)$ ここで、 $a=k$ を代入すると
$$P(k)=(k-k)Q(k)+R$$

$$P(k)=R$$
 よって $P(a)=(a-k)Q(a)+P(k)$ つまり $P(k)=0\Leftrightarrow P(a)を(a-k)$ で割り切れる。

具体例

$$P(a)=a^n-b^n$$
 とすると、 $P(b)=b^n-b^n=0$ なので、 $(a-b)$ は a^n-b^n を割り切れる 実際に、 $a^n-b^n=(a-b)(\sum_{k=0}^{n-1}a^{n-1-k}b^k)$ $n=3$ のとき、 $a^3-b^3=(a-b)(a^2+ab+b^2)$

2 $-1 \times -1 = 1$ の証明

$$-1+1=0$$
 (マイナスの定義 $-a+a=0$)
$$-1\times(-1+1)=-1\times0$$
 (一1をかける) (一1をかける) (一1)×(-1)+(-1)×1=0 (分配法則と、 $a\times0=0$) ($a\times1=a$) (両辺に1を足す)

3 統計

3.1 相関係数 (correlation coefficient)

分散 n個の資料 x_1, x_2, \ldots, x_n の分散 σ_x^2 は

$$\sigma_x^2 = \frac{1}{n} \sum (x_i - \bar{x})$$

と定義する。偏差の2乗和。

共分散 2変量(x,y)をもつn個の資料 $(x_1,y_1),(x_2,y_2),\dots(x_n,y_n)$ における共分散 σ_{xy} は

$$\sigma_{xy} = \frac{1}{n} \sum_{i} (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})$$
(ただし、 $\bar{x} = \frac{1}{n} \sum_{i} x_i, \bar{y} = \frac{1}{n} \sum_{i} y_i$)

と定義する。xの偏差とyの偏差の積の平均。

相関係数の定義 2変量(x,y)を持つn個の資料を $(x_1,y_1),(x_2,y_2),\dots(x_n,y_n)$ とする。 このとき、相関係数 r は

$$r = \frac{\sigma_{xy}}{\sigma_x \sigma_y}$$

と定義される。xとyの共分散を標準偏差の積で割る。

また、分子のnとxとyの標準偏差をかけることで生まれるnが打ち消しあうので以下の定義も可能

$$r = \frac{\frac{1}{n} \sum (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sqrt{\frac{1}{n} \sum (x_i - \bar{x})^2} \sqrt{\frac{1}{n} \sum (y_i - \bar{y})^2}}$$
$$= \frac{\sum (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sqrt{\sum (x_i - \bar{x})^2} \sqrt{\sum (y_i - \bar{y})^2}}$$

相関係数の絶対値が1以下の証明 相関係数rが $-1 \le r \le 1$ となることを証明する。

まず

$$x_i - \bar{x} = a_i$$
 $y_i - \bar{y} = b_i$ $a_i b_i = c_i$
$$\sum a_i^2 = A$$

$$\sum b_i^2 = B$$

$$\sum a_i b_i = C$$

とおくと

$$-1 \le r \le 1$$

$$-1 \le \frac{C}{\sqrt{A}\sqrt{B}} \le 1$$

$$-c \le x \le c \leftrightarrow x^2 \le c^2 \text{ is O C}$$

$$(\frac{C}{\sqrt{A}\sqrt{B}})^2 \le 1^2$$

$$\frac{C^2}{AB} \le 1$$

$$C^2 \le AB \qquad (AB \ge 0)$$

$$C^2 - AB \le 0$$

$$AB - C^2 \ge 0$$

のように変形できるのでこれを証明する